

婚約破棄ですか。別に構いませんよ

# 登場人物紹介

## マリアナ

グリフィード王国の  
王太子婚約者。  
超真面目で頑張りや。  
真面目すぎて  
知らず知らずのうちに  
体と心を壊しそうなタイプ。

## リーファ

セリアの親友。  
気配り上手のしっかり者。  
実は可愛モノ好き。  
セリアの前だけ、  
かなり砕けた話し方をする。

## ウィリアム

グリフィード王国の  
第二王子。  
成績は優秀で魔力も高く、  
人を掌握する能力にも  
長けているが  
手段を選ばない。

## シオン・コンフォ

辺境地にいる皇国軍大隊長。  
懐がととも深い。  
見た目で怖がられることが多いが、  
実は愛情深く優しい。  
家族と民を大事にしている。

## スミール

セリアの元婚約者で  
皇国筆頭公爵家の次男。  
派手で煌びやかなものを好む。

## アンナ

家柄の良い男を  
捕まえるために学園に入学。  
とにかくあざとい性格。

## セリア・コンフォート

辺境を守る皇女で超努力家。  
皇族で一番の魔力の持ち主。  
気が強く、ちょっと毒舌気味。  
趣味は魔法具製作。  
皇国の幸せが一番、  
自分は二の次だと考えている。

### プロローグ 婚約破棄されました

年に一度の最も重要な祝賀会。

国民全てがこの日の意味を改めて考えて祝う日。

そして、コンフォート皇国にとって、とてもとても大切な日。

それだけで、この祝賀会がどんなに重要なかわかるでしょう。そんな皇国内の高位貴族が参加する祝賀会で、それは突然始まりましたの。

「セリア!! 君は僕の信頼を裏切った。よって、僕は君との婚約を破棄する」

目の前に立ち、意気揚々にそう言い放つのは、私セリア・コンフォートの婚約者、確か名前はスミール様でしたね。忘れてましたわ。

忘れて当然ですよ。会ったのは数回しかありませんもの。それでよく私が変わりましたね。ああ、この髪色と瞳の色で。会場内で黒髪黒目は私しかいませんものね。それに若いです。消去法ですか。まあそれは構いません。構いませんが、婚約者に挨拶あいさつもエスコートも一切せず、いきなり目の前に現れるなりそう宣言するなんて、私はどう反応したらいいのかしら。

それに、そもそも誰に向かって言ってるのかしら。裏切ったですって。ほとんど会ってもいない

のに。馬鹿なの？ 馬鹿なのね。愚かにも程があるわ。

「こんな時でも、君は表情を変えないのか。君にとつて、僕はどうでもいい存在だったようだ」  
目を伏せ、苦しい表情でスマイル様は私に訴えてきます。

それは貴方ですよ。  
思わず、突っ込みそうになりましたわ。

まあ確かに、可愛げのある性格でも容姿でもありませんわ。じつと黙っていると、冷たいと思われるがちです。でも今回は、スマイル様の仰る通りですね。どうでもいいですわ。忘れてましたし。

ただ、皇女である私を散々蔑ろにしておいて、何を言ってるのとは思いますが。開いた口が塞がらないつて、こういうことを言うのね。一応淑女の端くれなので、見せてはけませんよ。もちろん、扇で隠しておりますわ。

ほんと、貴方の物言いに困惑して呆れ果てるだけなのに。

目の前にいる婚約者様は、さも悲しそうな表情をしながら切実に語ってらっしゃるわ。隣に女を侍らせながらね。呆れてものが言えませぬ。勉強になりましたわ。とはいえ、このまま一方的に言われるのはさすがに癪ですわ。

「私との婚約を破棄したいと仰るのね。スマイル様は」

一応、確認しますわ。淑女らしく、にっこりと微笑みながらね。  
隣にいる女が「ひっ」と小さく叫びましたわ。

あら、どうして貴女が身を竦ませているの。何故、怯えているのかしら。可愛い容姿が庇護欲を



唆るのとは本当なのね。それはわかりますが、婚約者でもない方との距離感間違えてませんか？腕に胸が当たってますわよ。貴女は娼婦ですか。この祝賀会に参加できるのは伯爵から上位の貴族だけですのに。貴族社会に疎い私でも、それぐらいはわかりますよ。

「そうやって、アンナを虐めていたんだな!! 可哀想に……こんなに怯えて。悪いと思わないのか!! いいか。これは、決定事項だ。よいな!!」

何もしていないのに、一方的に詰るスマール様。

にっこり微笑んでいるだけなのに、婚約者から蔑む目で睨み付けられました。いいえ、もう、元婚約者ですわ。

元々、婚約なんてしたくはなかったんです。

でも、しなくてはいけなかった。

必要な婚約だったのです。魔物討伐にはお金が掛かりますからね。

恥ずかしい話ですが、これ以上皇国の国庫から軍費を出す余裕がなかったのです。今ある国庫の物資とお金は、もしもの時に民に対して使うために置いていますの。

なので、お金のために、なかば無理矢理お父様が交わした婚約ですが、私はそれを素直に受け入れました。それについては今はいいですわ。それよりも、皇族を馬鹿にする態度は許せません。決して。

「構いませんよ。婚約を白紙に戻しましょう」

お金よりも矜持。

こちらから切り捨てましょう。スマール様のおかげでお金は回収できそうですから。心から感謝しますわ。

こんな絶好の機会、棒には振れませんよ。言いたいことはいろいろありますが、邪魔されないうちにさっさと白紙に戻しましょう。なのに、この馬鹿は……

「白紙だど!? 生温い。貴様はこれから先、貴族として生きることが許さない。平民として地面を這いながら生きろ!!」

声高らかに、スマール様は宣言します。

せっかく、私が婚約を解消してあげるって言っているのに、何を仰ってるのかしら。

それにしても、今度は貴族籍の剥奪ですか……。何の権限をお持ちなのですか？ まあ、私的には全然構いませんが。

「つまり、私の身分を剥奪すると仰るのですね。公爵家の次男ごときが。愚かな。一度口にしたのを取り消せないくらい、五歳児でも理解していますのに」

自然と声が低くなりますわ。

「なっ、無礼な!! この僕を馬鹿にするな!!」

スマール様は口汚く罵ります。今にも殴り掛かってきそうな勢いで。それを止めたのは、意外にも隣のアンナと呼ばれた女でした。

「待ってください、スマール様。セリア様はそれだけスマール様を愛していたんです。身分剥奪の上国外追放なんて、あまりにもセリア様が可哀想過ぎます。セリア様という婚約者がいながら、ス

ミール様を愛してしまった私が悪いんです」

目をうるうるさせながら、アンナがスミール様に訴えます。ほんと、あざといわね。私を庇いながら、自分を持ち上げるなんて。知らないうちに罰増えていますし。普通の貴族子女なら死刑判決ですわね。

「アンナ……君は本当に優しくして、美しいんだな。それに比べお前は!!」

アンナの肩を抱き寄せ、とことん私を責め立てるスミール様。三文芝居もいいところね。

不貞をはたらいた者が婚約者であった少女を一方的に断罪する。本来なら、責められるのは目の前にいる二人なのに。おかしいわね。二人を責める者はこの場にはいないのかしら。

どんな馬鹿でも筆頭公爵家の次男。公爵家を敵に回したくないのでしょうか。

でも私は皇女ですよ。情けないですわ。私もこの場にいる方々も。

「……そもそも、彼女と会ったことはないんですけど」

きっぱりと否定します。

会ったことがない人を、どうやって虐めるのかしら。反対に教えてほしいわ。

「何を言ってる!? 学院で散々虐めておいて」

蔑む目で見られました。私も絶対零度の視線をお返しします。情けないですね。これしきの視線でビクつかれるとは。

「学院ですか? 私は通ってはおりませんが」

私の台詞に、周囲の方々がざわつきます。そうでしょうかね。

「はあく。言うにことかいて、そんな見え透いた嘘を。だから嫌なのだ。辺境地の田舎者は」

心底軽蔑した様子で、スミール様は吐き捨てます。

やっぱり、そう思っていらっしゃったのね。もしかして、とは思っていましたが、そこまで馬鹿だったとは。公爵家は何も教えていないんですか。

スミール様が馬鹿にする辺境の地は、魔の森に密接している場所。言わば、コンフォート王国の護りの要なの。ありえませんわ。

それに関しては今はどうでもいいです、本当はよくありませんが。それよりも、今貴方は、私のことを辺境地の田舎者と仰いましたね。それがどういう意味か理解して仰っているのですか。ちよつと殴ってもいいですか? のしてもいいですか?

周囲では、失笑を浮かべていらっしゃる方もいますね。元婚約者様と同意見なのですわ。いいでしょう。その顔しかと覚えておきます。後悔しても遅いですよ。

私がそんなことを考えているとは露ほども思っていない様子のスミール様は、完全に汚いものを見る目で私を見えています。汚物は貴方の方です。

まあ確かに、ある一定の年齢に達した貴族の子息と令嬢は学院に通うのが、この国の常識です。

嘘を吐いてると思われても仕方ありません。

でも、私は通ってはいませんよ。

もう一度言います。通ってはいません。

「私は学院に一度も足を踏み入れたことはありませんわ。私が通っているのは学院ではなく、隣国

にある学園です。それも今年入学したばかりですわ。なので、アンナ様には会ったことはありません。虐めることなど不可能です。とはいえ、ここまで嫌われたのなら、もはや婚約の継続は不可能ですね。こちらから婚約破棄させてもらいますわ。構いませんよね、お父様。いえ、皇帝陛下」  
人ひとり殺してきたかのような険しい表情を隠そうともせず、姿を現した男性に向かって、私はそうはつきりと告げました。

駄目とは絶対に言わせませんわ。

## 第一章 売られた喧嘩はもちろん買います

皇帝陛下登場です。

とても険しい表情ですわね、お父様。でも、責任の一端はお父様にもあるのですよ。わかっています？ そう心の中で問い掛けながら、お父様を見上げます。さらに険しさが増しましたわね。ちゃんと心の声が届いて嬉しいですわ。さすが、私のお父様ですわ。

元婚約者のスミール様はというと、呆けたように私とお父様を見えていますわ。誰が顔を上げていいと許可を出したのでしょうか。周りをご覧なさい。皆様、頭を垂れていらつしやるでしょ。本当に、公爵様はご子息の教育をしてらつしやるのかしら。お父様の後ろに控えていらつしやる公爵様を窺えば、真つ青を通り越して真つ白な顔色で立っておられますわ。今にも倒れそうですわ。同情はし

ませんが。

元婚約者様もそうですが、一緒にいるアンナという令嬢も、同じように顔を上げて私を睨み付けていますわ。さつき、私が皇帝陛下を「お父様」と呼んだのを聞いていなかったの？ 自殺願望がおりなんですかね。でしたら、是非辺境に来ていただきたいものですわ。貴方たちにお似合いの仕事がありますから。

それにしても、お金のためとはいえこんな常識知らずと婚約をしていたなんて、私の最大の汚点ですわ。なのでなんとしても、白紙に戻します。皆様の記憶に残るのは仕方ないとしても、婚約者として戸籍に記載されたままにいるのは、とてもとても嫌ですわ。

「……………陛下の娘だと？」

現実を受け入れられないスミール様は、わなわなと震えながら呆然と呟いています。彼には話す許可が与えられていないのに。

五年間婚約を交わしていた仲なのに、やつぱり知らなかったのですわね。それだけ、私に興味がなかったということでしょう。改めてはつきり言葉にされると、少しショックですわ。それはそれで、とても不愉快ですわ。

さり気なく周りを見渡すと、私が皇帝陛下の娘だと認知している人は…………三分の程度ですわね。

見た目は全く似ていませんからね。中身はそっくりだとよく言われますが。

当然、冷笑してらした方々は知らなかったようですわね。公爵様と同様、真つ青になって小刻みに震えていらつしやるわ。

そうそう。認知している方々の中でハンティングできそうな方はいらつしやるかしら。皆は万年人手不足なので。給料はともいいんですが、その分危険なので働き手が少ないんです。そんなことを考えていると、眉間に深い皺を寄せながら、お父様は私に尋ねてきました。

「名乗っていないかったのか？」

ハンティングの件は一旦置いときましょう。

「名乗ってはいませんわ。だって、スミール様から正式に名乗りをされておりませんから」

正直に答えます。

「どういうことだ？」

重ねて問い掛けられます。

「どういうことと言われても、言葉通りですわ。筆頭とはいえ、公爵家のご息子が名乗りを拒否されたのに、皇族である私が名乗るのはおかしくはありませんか？」

皇族の威信に関わるでしょう。

「拒否された、だと」

とても低く、地を這うような声で、お父様は問いただしてきました。

なかなか会えませんが、お父様はお父様なりに私を愛してくれているのです。私がそこまで馬鹿にされているとは思わなかったのでしょうか。殺気がじわじわと漏れています。婦人や令嬢たちが当てられてよろめいています。公爵夫人もですわ。

あ、スミール様が腰を抜かされましたわ。恥ずかしくはありませんか。ほんと、これぐらいの殺

気で情けないですわ。アンナ様は気丈にもそんなスミール様に寄り添い、私を睨み付けます。でも、それは皇族である私に向ける視線ではありませんね。

「はい。五年前、初めて顔合わせした時からですわ」

取り繕う必要はありませんね。

「ちよつと待て。それはさすがにおかしくはないか？」

「私もそう思います。だって、互いの親を伴って顔合わせしたのですよ。もちろん、私が皇女であることは伝えたはずです。なのに、二人きりになると名乗りを拒否されましたの。その時、スミール様は私に対しよう怒鳴り付けたのです。『何故、名乗らない。マナーがなっていないな。さすが、辺境の田舎者か。マナーを一から勉強し直せ。僕の婚約者になるんだからな』と」

彼の言葉は一音一句覚えてますわ。

「どういうことだ？」

この問いかけは、背後に控えている公爵様とスミール様に対してですわ。

よほど、お父様が怖いのでしょうか。公爵様は冷や汗を浮かべながら答えます。射殺しそうな視線をスミール様に向けながら。

「私も何故そう思ったのか……全く理解できません」

そうでしょうね。私も全く理解できませんから。でも、その台詞貴方が言っただけじゃありませんよ、公爵様。違いますか？」

「……養女の話は流れたのでは？」

養女？ 何を言っているのでしょうか、スマイル様は。

「セリアは私の血を分けた子だが」

お父様の声がさらに低くなりましたわ。

「私は、てつきり、セリアが皇帝陛下の養女になるとばかり。いつまで経っても辺境地から出ないので、その話は流れたのだと思いは……」

しどろもどろで言い訳するスマイル様。

呼び捨てはやめてくださいませんか？ もう、婚約者ではないのだから。そもそも、婚約者であったとしても、皇族である私を呼び捨てにするなどあってはならないこと。それこそ、最低限のマナーでしょう。そう言いたいのはやまやまですが、ここはお父様にお任せしますわ。その方がダメージがありそうなので。

「だから、セリアを蔑ろにしたのか」

吐き出される息が白いですわ。殺気だけでなく魔力も漏れてますわよ、お父様。

それにしても、ずっとそう思い込んでいたのですね。どうして、そう思い込んだのかははなはだ疑問ですが、一応納得できましたわ。だからといって、到底許せるものではありませんが。

「このっ、馬鹿者が……!!」

怒鳴ったのは公爵様。

あっ、スマイル様が吹っ飛びました。巻き添えになった貴族たちから悲鳴が上がります。怒りで顔を真っ赤にした公爵様が跪き、私とお父様に頭を垂れ謝罪します。

「誠に申し訳ありません。陛下、セリア皇女殿下。まさか愚息がそうに思っていたとは……」  
気付かなかったと言いたいのですね。

「……そうですか。いくらでも、気付く余地はあったと思いますが。それはそれは、スマイル様の態度は酷かったですからね。私の侍女たちが彼の元へ暗器を持って消えようとしたのを、何度止めたことか。数えるのも億劫なぐらいでしたよ、公爵様。私の前でもそうでしたから、当然屋敷でもその態度を隠すことはしなかつたでしょうね。器用なタイプではありませんから。息子可愛さに、そのまま放置した罪は決して軽くはありませんよ」

お父様によく似た絶対零度の目で公爵様を見下ろします。その時でした。

「どうして、そんな酷いことができるんですか!! 私を虐めて、今度はスマイル様と義父様を、こんな公衆の面前で!!」

アンナが意味不明なことを叫びます。

ブーメランって、言葉知ってます？ さつき、その公衆の面前で私に対して婚約破棄を言った人と一緒に何言ってるのですか？

呆気に取られている私を見て、アンナは勘違いしたのか、涙を霽しながらスマイル様に寄り添い背中手を添えられました。傍から見たら、健気に寄り添う乙女のお姿ですね。中身は正反対ですけどほんと強かですよ、口角が上がってますよ。

「そうだ。お前はアンナを虐めただろう!!」

痛みで顔を歪めながら、馬鹿が怒鳴ってます。彼らなりの反撃でしょうか。でもそれって、自分

で首絞めているの気付いてます？ 気付いてないんでしょね。

手を床について誠心誠意謝るのなら、まだ手加減してあげるつもりでしたのに。それでも、貴族としては終わっていますけどね。まだ、辛うじて生きていけたと思いますよ。なのに、さらに自分で首を絞める真似をするなんて、ほんと何を考えているか理解できません。

理解できませんが、どこまで私を馬鹿にすれば気がすむのかしら。私が貴方たちに何かしましたか。「そもそも、学院に通っていない私がどうやって、そこにいる女を虐めることができるのです？ましてや、隣国にいたのですよ」

「そんなの決まってるじゃない!! 誰かにやらせたのよ!!」

スマイル様、もう馬鹿子息でいいわね。彼に尋ねたのに、答えたのは血走った目をしたアンナ。どちらでも構いませんわ。

「誰かとは、誰です？」

念のため、訊くことにしました。

「そんなの、私を知るわけじゃない!!」

返答がこれです。逆ギレですか。

完全に妄言ですね。証拠一つありません。それで、皇族である私を公の場で断罪しようとは。本当に命が惜しくないのかしら。さすがに私も理解できなくて、眉を顰めてしまったわ。しかし、これだけは言わなくてははいけませんね。

「私は貴女に話す許可を与えましたか？」

上位の者が許可を出さない限り、下位の者が口を開くことは許されません。

これは貴族社会において、基礎中の基礎のマナーですわよ。周りをご覧なさい。皆様黙っておいででしょう。それとも、貴女は皇女である私以上の位なのかしら。私には姉はいませんよ。

「そうやって、すぐに身分を言い出す。そんなに身分が偉いのですか。ただ、生まれた場所が違うだけじゃないですか。そんなんだから、虐めなんてできるのよ」

何を言い出すの？ この女は。会ったのも、今日が初めてなのに。自分の幸せのためにとことん、私を悪者にしたいようね。

「そうだ。アンナの言う通りだ。そんな性根だから、辺境地なんかを送られるんだ」

ましてや、それがおかしいとは思わず、アンナと一緒に私を断罪する馬鹿子息。

「今、何て仰いました？」

聞き間違いではありませんよね。

—— 辺境地なんか。

確かにそう言いましたよね。どの口がそれを言うのでしょうか。私を取り巻く周囲の空気が一瞬でがらりと変わりましたわ。

さつきまでは、私に対する蔑みや苦笑だったのに、今は怒りや仇を見る目で二人を見下ろしています。今この場でその発言をなさるとは当然ですよ。ある意味勇者ですわ。

貴方のお父様は顔を真っ赤にして拳を握り、わなわなと震えていらっしやるのに。

「謝ってください、セリア様。そうすれば、許してさしあげます」

さしあげる？ 今そう仰つたの、皇女の私に、下位令嬢もしくは平民の貴女が？

「そうだ、今すぐアンナに謝れ。そうすれば、辺境地から出られるだろう」

馬鹿子息はアンナと同様、上から目線です。

貴方たち、そんなに死にたいのですか。やってもいない罪を謝れと言い、またしても辺境地を馬鹿にし、蔑む発言を繰り返す。一体、貴方たちは今まで何を勉強してきたのですか。

「黙れ」

遂に、お父様がキレましたわ。すでに私もキレています。

馬鹿子息もあの女もビクつき慄きました。腰を抜き、無様にも座り込んでしまったわ。

その瞬間、私の側に控えていた侍女が馬鹿息子とアンナを背後から拘束しました。

「ヒッ!!!」

本当にお似合いの二人ですね。悲鳴も一緒に上げるなんて。

「この場は駄目ですよ」

私は侍女二人をやりわり窘めます。

「この場でなければよろしいのですね」

嬉しそうな、弾んだ声で二人が答えます。今までずっと我慢してきましたから。これ以上の我慢は体に障りますね。そろそろ許可を与えてあげましょうか。

でも、まだ止めを刺していませんからね。

「もう少し我慢できるかしら」

「畏まりました」

二人とも優秀な侍女です。私の意図をちゃんと汲んでくれます。首筋に当てたナイフを退けませんが、まあそれぐらいは許してもいいでしょう。

それでは、始めましょうか。

「つまり、貴方は私の性根が悪くから、矯正のために辺境地に送られたと言いたいのかね。理解したわ。貴方たちにとって、私は皇帝陛下に棄てられた可哀想な子なのね。さつきも……いえ、初めて会った時から、辺境地を散々田舎と馬鹿にし、蔑んでいたものね。だから、辺境にいる私も蔑んで当たり前。皇女でも」

につこりと微笑みながらあえて念をおしました。だけど、目は全く笑ってはいません。私のお父様以上に冷たく低い声に、周囲の温度もさらに下がります。それがどうしました？

馬鹿子息と女は、この場にいる貴族全員、いえ、この皇国そのものに喧嘩を売ったのです。

絶対許しませんよ。覚悟なさい。

「僕は間違っていない!! 辺境地にいる貴族なんて田舎者の集まりじゃないか。野蛮な者たちの巢窟だろ。まともなドレスなど一着も持っていないじゃないか。冴えない服ばかり着て平気で貴族街を歩いている、貴族なんて名ばかりの平民だろ」

馬鹿子息が喚き散らしています。

好き勝手なことをほざいてくれますね。

馬鹿子息がほざく度に、私の心が段々冷たくなっていきますわ。

「確かにそうですね。辺境地の人間は装いには疎い面がありますわ。あれでも彼らなりに気を付けているらしいけど。まともなドレス？ 貴方の言う通り、そんな物持つてはいませんよ。もちろん、宝石類もね。そんなお金があれば、装備に回します。砦の設備に、兵士たちに回します。ドレスや宝石を身に着けてパーティーやお茶会に参加するのが貴族なら、辺境地に住む貴族は貴族ではありませんね。当然、私もですが」

そう答えると、馬鹿子息は歪な笑みを浮かべ私を見上げました。女もです。

一瞬、その顔を潰したくなりましたが、ここはグッと我慢します。代わりに、私の優秀な侍女たちの手に力が少し入ったようです。

馬鹿子息とアンナは、また仲良く一緒に「ヒッ!!」と悲鳴を上げ、ガタガタと震えています。ちよつと切れただけじゃないですか。大袈裟ですよ。

では、気持ちを落ち着けて続けましょうか。

「ですが、私はそれを恥ずかしいなどと思ったことはありませんわ。反対に、誇りとさえ思っています。理解できないって顔をしていますね。貴方たちは今まで何を学んできたのですか？ こちらが理解に苦しみますよ。周りをご覧なさい。どのような目で貴方たちを見ていますか」

私に促されて、初めて周囲に視線を向ける馬鹿子息とアンナ。

ようやく冷笑や蔑みではなく、明らかな怒りと憎しみの目で睨まれていると気付いたようです。当然それは、目の前にいる自分の父親も同じでした。

「父上……何故、そのような目で僕を見るのです？」

自分の父親にまで睨まれ、馬鹿子息はショックを受けて混乱したままポツリと呟きました。

「貴方の言う貴族が、ドレスや宝石を身に着け社交という戦場に出るように、私たちは鎧を纏い剣を携えて杖を持ち、戦場に立つ。この国を護るために」

公爵の代わりに私が答えます。

「国を護る？ 貴族なら当たり前だろ」

絞り出すような声で馬鹿子息は反論します。

「辺境の貴族を名ばかりの平民と罵りながら、貴族なら当たり前と仰るのね。皇都に住む自分たちは護られて当然の存在だと」

「それがどうした!? 何、当たり前のことを言ってる。そんなのだから、辺境地に送られるんだ」馬鹿子息の発言に周囲がざわめき出します。

筆頭公爵様は我慢ならんとばかりに、馬鹿子息に詰め寄ろうとなさりましたが、私は無言のまま片手を上げ制しました。気を失ったら困りますからね。

「今から七十年前、貴方と同じことを、今みたいに公の場で宣言された方がいました」

そう私が切り出すと、馬鹿子息は不審そうな表情を見せます。わざわざ貴方の疑問に答えてあげているのに。ちなみに、今から話す内容は貴族籍をお持ちなら、幼くても知っていることですよ。

「その方はこの皇国の第二皇子。婚約者は辺境地を統治する伯爵令嬢でした。当時、第二皇子には貴方のように皇都に恋人がいたそうです。婚約者を邪魔に思った彼は、明らかな冤罪を恥ずかしげもなく彼女にかけた。常日頃から、婚約者を馬鹿にしていたようです。今の貴方のようにね」

「冤罪じゃない!!」

「冤罪なんかじゃないわ!!」

まだ言い張るの？ 途中で茶々を入れないでください、話が進みませんから。視線を侍女二人に向けると、心得たとばかりにナイフを持つ手に力を入れました。静かになりましたわね。では、続けましょうか。

「公の場で婚約破棄を宣言し、その場にいた貴族たちは第二皇子に賛同した。何故だと思えます？ そう……この時は貴族の間で、貴方の言った考えが主流でした。結果、この国がどうなったか知っていますか？」

一旦言葉を切ってから、間を空けて続けました。

「……皇国が滅び掛けたのですよ」

「……：皇国が滅び掛けた？」

オウム返しのように呟く馬鹿子息。

そんな彼を見て抱く感情は、呆れと困惑、そして怒りだけ。ただただ、屑を見るような冷めた気持ちで見下ろします。

訊き返されることすら、私にとって——いえ、違いますね、この場にいる全員にとって信じられないことでしたから。

「……本当に知らないのですか？」

思わず、訊き返してしまいました。

何故なら、私たち皇国の民は平民、貴族関係なしに、幼少時から絵本などで皇国の歴史を勉強し、同時に、辺境地の重要性も叩き込まれるからです。

歴史を生きた教材として。

故に、皇国が滅び掛けた事件に関しては、皇国民なら全員知っている事柄です。二度と過ちと悲劇を繰り返さないように、皇国民全員が忘れないために。文字を知らない赤子ならともかく、貴族が、それも筆頭公爵家の人間が知らないなんてありえません。あつてはならないのです。

ましてや、皇国を滅ぼし掛けたあの第二皇子と同じ考えを抱くなど……決して見過ごせません。その芽は徹底的に潰します。もう二度とそこに草一本生えないまで。

「馬鹿にするな!! それぐらい知っている。魔物に攻められたんだろ。辺境地の奴らがさぼったせいで」

激昂する馬鹿子息。

言葉を失う私たち。

……：さぼった。

言うにことかいて、何を言ってるの……？ この馬鹿は。

おそらくこの場にいる全員、そう思ってるでしょうね。

「……どういふことだ？ ジュリアス」

感情のこもらない静かな声で、お父様は公爵様に尋ねます。それがかえって、怒りの深さを感じさせます。怒りの沸点を大幅に超えると、人は感情を失うのですね。

お父様にそう尋ねられても、公爵様が答えられるわけありません。彼は力が抜けたように、その場に座り込んでいます。一気に老けた感じがしますね。同情はしませんわ。因果応報ですもの。年がたってからできた息子ですものね、散々甘やかしたツケが回ってきたようですよ。

私は公爵様に向けた視線を馬鹿息子に戻します。「それは違います。断じて違います。辺境地の方々のせいではありません。彼らは自分の身を削つてまで、自分の領土にいる民、ひいては皇国の民を魔物から護り続けてくれた。いつしかそれを当たり前のように思い、感謝の気持ちを忘れてしまった。軽視してしまった。そして遂に、最悪の形で裏切ったのです。悪いのは、第二皇子と私たち皇族と貴族です」

辺境地を治めるのはコンフォ伯爵。私が現在、滞在しているのも伯爵の家です。伯爵が治める辺境地は魔の森に面しています。魔の森には澱みがあり、そこから魔物は生まれます。故に結果として、魔物の多くは魔の森から出現するのです。

言わば、コンフォ伯爵が治める辺境地は魔物討伐の最前線。

そこに、ドレスや宝石などいりません。一体、何の役に立つのでしょうか。

「ただの婚約破棄だろ？」

「そうよ。そうよ」

鼻で嗤うように言い放つ馬鹿息子とアンナ。

本当に知らないのね。それとも、都合がいいように解釈してるのかしら。どちらにせよ、知らないってことよね。あゝその顔を踏み潰したいわ。でも今は我慢しないとけません。

「事の発端はそうです。しかし、それだけでは終わりませんでした。第二皇子とその取り巻きたち、そして第二皇子の恋人の手によって、元婚約者は無残にも殺害されたのです」

「なっ!?」

二人とも驚愕してるようですが、ここまでは皇国の民なら全員知っていることですよ。

さすがに、教育上悪いのでどのような最期を迎えたのかまでは記載されませんが。死者にも人権がありますからね。ただ、貴族籍がある者は成人になった時に親から教わります。貴方はすでに成人していますよね。

「無実の罪で投獄し、拷問をした上、さらには戮りものにして。そして、亡骸を平民の共同墓地に棄てたのです。王弟殿下が事実を知り慌てて駆け付けた時、その亡骸は、誰だか判別つかない程酷い状態だったと伝え聞いております」

思い出す度に胸がギュッと締め付けられますわ。

とても美しい方だったと皆から伝え聞いております。今でも、彼女の墓には絶えることなく花が供えられていますよ。私も何度も参らせてもらいましたわ。

「この話は、貴族なら知っていて当たり前です。平民でさえ、何故殺されたか知っておりますよ」知らないのは貴方たちだけですわ。

「そんな事実、僕は知らない。見え透いた嘘を吐くな!!」

「私も聞いたことないわ。そんな作り話をして逃げようなんて許さないんだから!!」

興奮する馬鹿息子とアンナ。

丁寧に教えて差しあげたのに、怒鳴られてしまいましたわ。

「貴方たち、頭大丈夫ですか？ 皇帝陛下がおられる前で、皇国の骨幹に関わる事柄に関して嘘が吐けますか？」

思わず、そう突っ込んでしまいましたわ。

こんな馬鹿たちにわかるように話すなんて、ほんとストレスしかありませんわ。でもせっかくです。これも生きた教材にしないといけませんよね。

いくら歴史で習っていても、親から聞かされていても、平和な時代が続けば、どうしても危機感薄れてしまう。それは仕方ないことでしょう。それを責めるつもりはありません。

ありませんが、この風潮をこれ以上看過することはできませんわ。

馬鹿子息とアンナ嬢は例外中の例外ですが、辺境地の重要性和役割を軽んじる風潮があるのも、悲しいですが現実なのです。

馬鹿子息も言っていました。服装や立ち居振る舞いに関して、陰で冷笑している貴族が多いのも、私たち辺境地に住む者を軽んじる態度の表れでしょう。魔物の討伐に忙しくて、お茶会やパーティーに参加できないのも、そういった風潮を加速させているのだと思います。

このまま何の手も打たなければ、今度こそ彼らは皇国を去ってしまう。そうなれば、皇国は滅んでしまうでしょう。それは間違いありません。

愚かな貴族たちが死ぬのは構いません。自業自得ですから。でも、そのせいで民が犠牲になるのは我慢できません。

それを防ぐためにも、馬鹿子息とアンナ、そしてこの馬鹿子息をきちんと教育しなかった筆頭公爵夫妻には、皇国の未来のための礎いしづえになつてもらわなければなりません。当然、アンナの両親にも諦めてもらいましょう。

「辺境地だからと蔑あやむまれ続け、皇族から打診され結ばれた婚約も一方的に破棄され、無残にも殺された。それも第二皇子が自分の欲望を叶えるために。そしてその亡骸なきがらは、埋葬されることなく平民の共同墓地に棄てられた。そのような仕打ちを受けて、許すことができますか？ 国を護るために、その身を盾にできますか？」

黙り込む馬鹿子息とアンナ。その顔色は真っ青でした。

少しは、自分がなさろうとしていたことが、どういう意味かわかっていただけでしょか。貴方たちはまるつきり同じことをしようとしていたのですよ。

「当時の皇帝陛下は息子可愛さに、愚策にも、形ばかりの処罰を第二皇子と側近たちに下し、伯爵には多額の賠償金で何もなかったことにしようとししました。王弟殿下が亡骸なきがらを領地に運ばなければ、ご遺体はそのまま野ざらしになっていたでしょう」

人として最低最悪な行爲です。彼らは二度、伯爵令嬢を殺したのです。

「……それで、どうなったんだ？」

馬鹿子息は震えながらも訊いてきます。

「勇敢な者たちは領地に籠かこまりました。自分の領民を集め、彼らだけを護る盾になったのです。当然、辺境の警護も手薄になります。手薄になったところから魔物は入り込みました。そして、皇国

の民を蹂躪していったのです。皇帝陛下や貴族たちは伯爵に助けを求めましたよ。原因になった自分の息子と新しい婚約者、そして側近たちの首を差し出して。しかし自分の首は差し出さなかった。おかしいとは思いませんか？」

二人とも多少の想像力はあったようですね。カタカタと震えながら大人しく聞いています。

「……人は無力です。鋭い牙も鋭い爪も持っていません。強靱な肉体も持ってはいません。さつきまで鋏を持っていた周辺の領民になす術などありません。当然、貴族もです。……唯一、戦う力を持つ騎士団も魔術師も魔物にはかありませんでした。当然ですね。彼らが相手にしていたのは、人だからです。魔物など相手にしたことがなかった。一度もね……」

一旦、私は言葉を切りました。ここにいる誰もが、音を一切立てずに聞いています。

「嫌なことも辛いことも、全て伯爵様の一族に押し付けていた。それをこれっぽっちも悪いとは思っていませんでした。当たり前だと考えていた。だから、感謝の気持ちもなかった。なかったから、平気でこの皇国の護り神だった伯爵家を蔑ろにした。最悪の形で裏切った。その結果、皇国の滅亡の危機を招いたのです」

「……でも、滅亡はしなかったじゃないか」

馬鹿息子が俯いたままポツリと呟く。

「だから？ まさかそれで、貴方の暴言が取り消されるとでも思っているのですか。もしくは軽くなるだけでも。ありえませんが、反対です。貴方たちの罪を確認するために言っているだけですよ」

勘違いしないでください。

「だったら、謝ればいいんだろ!!」

そんな投げやりの心が籠もっていない謝罪になんの意味があるんです。

「謝って済む段階はどうに過ぎていきます」

「どこまでも生意気な。誠心誠意謝ったから、伯爵は許したんだろ!!」

だから、「お前も許せ」っと仰りたいのですか？ 本当に、顔の皮が厚い人ですね。

「貴方の言う通り、確かに皇国は滅びはしなかった。それは皇族や貴族たちが謝罪したからではありませんよ。一人の人間の真摯な姿に心を打たれたからです」

そう……彼のおかげで、この皇国は救われたのです。

私の声が響く中、唐突に、だがはつきりとその声は聞こえました。

「煩い」

悪意を含んだ小さな声が、私と馬鹿息子との話に水を差したのです。

え……？

一瞬間聞き間違いかと思いましたが。まさかこのタイミングで、そんなことを言い出す人がいるとは思像だにしませんでしたから。

私は声の主の動向を見るために、さり気なく侍女二人に離れるよう指示を出しました。渋々ですが、侍女二人はナイフを退け離れます。安心なさい、彼らは後であげますから。

「さつきから、関係のないことばかり話して、はぐらかそうとしても許さないので!! それって昔の話でしょ。今は関係ないじゃない!!」

真つ青でカタカタと震えていた女性とは思えませんね。あれは演技だったんですか？ あつ、ナイフを首筋に当てていましたね。だからですか。話の内容に震えていたわけではなかったのですね。とても残念ですわ。

「関係ないと仰るの……」

「またしても、低い声が出てしまいましたわ。」

「そうよ。私を虐めたじゃない」

「まだそれを引つ張りますか。うんざりです。振り出しに戻った感アリアリです。内心、後はお父様にお任せして帰りたくまりましたわ。」

「何故、私が貴女を虐めなければならぬのです？」

「スミール様に愛されているからよ!!」

「だから、それがどうしたというのです。」

「私がスミール様を愛しているとも思っているのですか。いいえ、全く、これっぽっちも愛しておりません。なので、邪魔する必要も、虐める必要ありません。それにそもそも、私は隣国の学園に通つてます。どうやって虐めるのです？ 誰かにやらせたと？ そんな人いませんよ。お茶会に参加したこともないのに」

「きつぱりと否定しました。そんな勘違いされるなんて、不愉快でしかありませんから。だけど私も皇族の一員です。関心がないからといって、婚約者の役目を放棄するつもりはありませんでしたわ。ところで馬鹿息子、何故貴方がそんなにショックを受けているのです？ 私が貴方に好意がある

「とでも思っていたのですか？ 貴方のどこに好意を持つ要素があるのです。会えば、見当違いのことで怒鳴られ、誕生日などのプレゼントも一度として贈られず、手紙一つない。そんな目にあえば、嫌いこそすれ、好意を持つなんてありえませんか。それに、そもそもお茶会に参加したことがないんです。パーティーも。もちろん、招いたこともありませんよ。辺境地で魔物討伐していたせいもあります。そもそも私は——」

「セリア様。心の声が漏れています」

「私の背後に回り込んだ侍女が、それとなく耳打ちしてくれました。」

「別に構いませんが、これからは気を付けないといけません。聞かれて困るものではないので別に構いませんが、これからは気を付けないといけません。」

「そんな見え透いた嘘を吐くなんて。スミール様を愛していたから、私に酷いことをしたんですよ。さつさと認めなさいよ!!」

「酷さを通り越して醜悪しかありません。話が全く噛み合わない。魔物の方がまだ可愛げがありますわ。いったい、どんな育ち方をすればこうなるのかしら。隣をご覧なさい。貴女の愛する方がその態度に引いていますわよ。」

「嘘つて……私はまだ、成人しておりませんよ」

「学園も先月入学したばかりです。もしかして、元婚約者の年齢も知らなかったのですか？ 無関心もいところですね。」

「だったら、何で、このパーティーに参加してるのよ!!」

そういう貴女は、愛人枠で参加しているのでしょうか。

彼女の指摘通り、本来ならこのようなパーティーの場に、成人していない私が参加するのはおかしい話なのですが、今回は特別に参加が認められております。

何故なら、このパーティーは……

「……貴女は、このパーティーが何を祝って催されているのか知らないのですか？」

「そんなの知らないわよ!!」

まさか、そんな返答がようとは……だから思わず、呟いてしまいましたわ。

「貴女は本当に貴族なのですか？ この皇国の民ですか？」

その呟きはおそらく、その場にいる全員の前にも浮かんだはずです。

今日が何の日か。

皇国に住む者なら皆知っています。知らないはずがない。

なのに、アンナから出てきた言葉は全てを否定するものでした。

信じられません……許せません。

だって今日は、この皇国を救った英雄が生まれた日ですよ。今王宮で開催されているのは、それを祝うパーティーなのです。同時に、魔の森の脅威から皇国の民を護っている伯爵様たちを労う場でもあるのですよ。わかっているのですか。

平民も、この場に参加できない下位の貴族たちも今日は仕事を休み、英雄の生誕を祝います。あの女にとっては、ただの祝日なのかもしれませんが。

英雄である王弟殿下が亡くなった日は、民の全員が哀悼の意を込めて黒の服を着ます。伯爵令嬢が殺された日もです。

そうやってずっと、皇国が滅び掛けたことを忘れないようにしているのです。悲劇と向き合い続けているのです。二度と同じ悲劇を繰り返さないために。

本来なら、このパーティーに参加するのはコンフォ伯爵様でした。しかし、魔物の活動期に入っ  
てしまい、皆から離れられません。当然、隊長や副隊長たちもです。

とはいえ、仮にも主賓が、パーティー不参加では格好がつかないのも事実。というわけで、隣国に留学していた私が急遽参加することになったのです。まあ一応、未成年ですが関係者になりますからね。

この大事な日を、大事な事柄を、ただの昔話だと一蹴する神経が到底私には理解できません。

「何、当たり前のこと言ってるのよ!! この国に住んでるんだから、この国の人間に決まってるじゃない!!」

髪を振り乱し食ってかかってくる様子は、眉を顰めてしまう程にマナーも何もなく、あまりにも見苦しくて滑稽でした。

「スミール様、貴方はこんな女を愛したのですか？ 何が良かったのです？ 惹かれる要素がどこにあるのですか？」

思わず尋ねてしまいましたわ。しかし、馬鹿子息の答えは返ってはきません。ショック過ぎて放心しているようです。

反対にアンナは、汚い言葉で私を罵ります。私が皇女だと忘れてしまったのでしょうか。脳みそ入ってます？ 皺ありますか？ 不敬罪で死にますか？

アンナの言う通り、確かにこの国に住んでいれば、籍を持っていけばこの国の人間でしょう。だけど私が言っているのは違う意味です。何故それがわからないのですか。

「貴女は皇国の貴族として、民としての誇りはないのでですか？」

「誇り？ それが何なの？ 辺境地に追いやられたくせに、偉そうなことを言わないで!!」

アンナは私にそう吐き捨てました。少しは期待した私が馬鹿でした。愚かでした。こういう人間もいるのですね。だけど、これだけは言わせてもらいます。

「辺境地に追いやられた？ 何を言ってるんです。私は皇族を代表して辺境地に赴いているのです。棄てられたわけでも、追いやられたわけでもありません」

「ふんっ。そう思ってるのは、貴女だけじゃないの」

アンナは明らかに私を馬鹿にしています。

端から私の言うことを聞く気はないのですね。よくわかりました。

それでも、私は誤った認識のまま置いてほしくはありませんでした。

私のことは何と言われようと構いません。

ただ……辺境地が、厄介者が大勢いる場所だと思われたままは嫌だったのです。どうしても……その思いで言葉を続けます。

「コンフォ伯爵家から見放され、平民を壁にしながら逃げ惑うだけの貴族がほとんどの中で、唯一、最後まで民を護るために戦ったのが、後の英雄である王弟殿下でした」

「それがどうしたのよ」

アンナは反論してきます。素直に聞く気はさらさらありません。

「最後まで聞きなさい!!」

ここに来て、初めて強く叱責しました。少し強く言い過ぎたかしら。アンナはビクツと身を竦ませ震えています。戦場ではこれくらい普通なんですけど。まあいいわ。大人しくなつたし。

「続けます。……王弟殿下は腕を失い、片目を失いながらも戦い続け、最後は立ったまま絶命したそうです。王弟殿下は一度もコンフォ伯爵家に対し、戦えとは言いませんでした。悪いのは、我々の方だと。その潔さと、民を護ろうとする真摯な姿に心を打たれ、コンフォ伯爵家はもう一度、皇国の護り神としての役割を果たす決意をしたそうです。ここまでは理解できましたか？」

アンナは頷きもしない。反抗的な態度ですね。あつ、ブルブルと震えだしましたわ。そうでしょうね。侍女二人の殺気が凄いですから。彼女たちに表情は全くなく、それがかえって怖いです。とうとう、猿轡を取り出しましたわ。

「そして、王弟殿下を慕っていた第一皇子が皇帝陛下を討ち、次の皇帝陛下となりました。彼はいろいろなことを取り決め、後に賢王と呼ばれるようになりました。その皇帝陛下が取り決めた事柄の中に、皇族はコンフォ伯爵家と一緒に民を護るという一文があります」

「……っ！ ん〜！」

相変わらず反抗的な態度ですね。喋れない分私を睨んできます。いい加減うんざりですわ。もうすぐ終わるので我慢しなさい。

「皇族の中で一番魔力がある者が、辺境地に赴き魔物の討伐に参加する。つまり、私のことですよ」わかっていただけましたか。さて、ここまで長々と話したのは理由があります。それでは、そろそろ詰めましょうか。

「そして今日は、王弟殿下の生誕の日。魔物討伐に関わる者たちを労うこの大事なパーティーの場で、貴方たちは何をしましたか？」

「元だけはにっこりと微笑みながら、私は馬鹿子息とアンナにそう尋ねました。ほんと、ここまで長かったですわ。」

「何か言ったらどうですか。無言のまま項垂れても何も変わりませんよ、スマイル様。いまさら無言は許されません。ほら、隣にいる貴方の恋人をご覧なさい。彼女のように、猿轡を嚙まされていないのだから、言葉を発することはできるでしょう」

常識のない人間は最後まで常識がありませんでした。なので、途中から猿轡を使用いたしましたわ。聞くに耐えない言葉を発していましたし、ある意味、彼女は獣と同じですからちよいといいでしょう。自分の欲求に忠実な点は特に。

「英雄の生誕、そして皇国の護り神に感謝するパーティーの場で、皇国を滅ぼし掛けた悲劇の一端を再現された感想をお聞かせくださいな。皆、聞きたがっていますよ。そうでしょう、皇帝陛下」ここまで自由にさせてくれたお礼を兼ねて傍観者に徹していたお父様に振ってあげましたわ。

「ああ。聞きたいな」

口角が上がって微笑んでいるように見えますが、目は全く笑ってはいません。どこまでも冷たく鋭い目で、馬鹿子息を見下ろしています。もちろん、私もです。

ほんの少し私たちと視線が合っただけで、馬鹿子息はガダガダと震え出しました。

まあ当然ですね。鍛え方が根本から違うのですから。

「さあ、皇帝陛下もそう仰つてるのです。早く、教えてくださいな」  
「にっこりと微笑みながら催促します。すると、か細い声が聞こえてきました。

「……………ゆ……………許してくれ」

「許す？ 何を許すのですか？」

貴方に情状酌量の余地があると思ってるのですか。

「ぼ、僕は悪くない。騙されただけなんだ。……………そうだ。この女に騙されたんだ。だからもう一度僕とやり直してくれ、セリア」

いまさら、馬鹿子息に嘆願されてもね……………。言うにことかいて、やり直したいなんて。本気で思っているのでしょうか。もしそうなら、なんておめでたいんでしょう。

そうそう、別の意味でありえないと思っている人間もいるみたいですよ。猿轡をしたまま、獣のように唸っている方がね。血走った目で自分を裏切った恋人を睨んでいます。つい数十分前はとも仲のいい恋人同士、運命の相手でいらっしやっただのにとても残念ですわ。

「やり直す気などさらさらありませんわ。言ったではありませんか、婚約を白紙に戻すと。構いま

せんよね、お父様」

「ああ。今この場をもって、我が娘セリアとスミールとの婚約を白紙に戻すこととする」

この宣言をもって、私と馬鹿子息との婚約は正式に解消されました。思わず、微笑みましたわ。反対に、筆頭公爵様は呆然としたまま、崩れるように膝をつきます。

これで、彼の思惑は完全に潰えましたわね。

正統な後継者である長子がいながら、元は妾の子である馬鹿子息を、私と結婚させることで継がそうと目論んでいた。たまたま、皇家から婚約を打診されて思い付いたようでしたけど。浅はか過ぎません？ まあでも、公爵家が今までと同じように存続できるとは思いませんけどね。よくて子爵か男爵に格下げ。悪ければ平民落ち。最悪、死刑もありますわね。不敬罪はそれ程重い罪なのです。私なら平民落ちが妥当だと思えますが。どちらにせよ、これから大変ですね、元公爵様。貴方を義父と呼ばずに済むなんて、心から馬鹿子息に感謝しますわ。

こういう時、扇ってほんと便利ですね。にんまりと笑った口元を上手く隠せますから。

「ありがとうございます、皇帝陛下」

公爵様から視線を外し、お父様を見上げます。

「私の方こそ悪かった。辛い思いをさせたな、セリア。まさか、こんな屑だとは思わなかった」

苦痛に満ちた表情を見せますが、嘘臭く感じるのは私だけでしょうか？ 本当にそう思ってます？ さすがにこの場では訊けませんけど……時間があれば、後で問い質したいところです。

「セリア!!」

全て終わったはずなのに、まだ現実を直視できない人がいますね。

「先程から、誰に向かって口をきいているのですか」

私は皇女ですよ。

「セ、セリア様!! 僕は——」

様ですか。やはり、及第点以下ですね。この場合、セリア皇女殿下でしょう。

言い直したつもりの馬鹿子息は、まだ縫りつこうとしてきます。それを止めたのはお父様でした。「衛兵、この男を地下牢に放り込んでおけ!! ついでに、この女もな」

お父様はアンナを指差します。

「はっ!!」

駆け寄ってきた近衛騎士たちは、両脇から腕を掴み乱暴に馬鹿子息とアンナを立たせると、なかば引き摺りながらパーティー会場から出ていきました。もちろん、元公爵様もです。

やっと、静かになりましたね。最後まで往生際が悪かったです。

邪魔者が排除され、ずっと止まっていた音楽が流れ出しました。徐々に元に戻り出す会場内。

そんな中、お父様が私に手を差し出してきました。もしかして、ファーストダンスのお誘いですか。あの馬鹿子息の代わりに相手をしてくださるの。嫌だと言っても、絶対引きませんよね。ならここは、素直に踊りましょうか。代わりとってはなんですけど、一つ希望をきいてもらいましょう。「皇帝陛下。いえ、お父様。一つお願いがあります。あの馬鹿子息とあの女を私にくださいませんか」

くれますよね。もしくれなかつたら、侍女二人が何をするかわかりませんよ。もちろん、私は止めませんわ。

「やっぱり、娘と踊るのが一番楽しいな」

パーティーが終わった数日後、しみじみと紅茶を飲みながら咬くはいているのは、お父様です。まるでお祖父様のような台詞せりふですわね。まだ、三十代後半でしょう。見た目は二十代なかばですが。

「父上。その台詞せりふ、嘘うそっぽいですよ」

苦笑しながら、私の気持ちを代弁してくれたのは一番上のお兄様です。ちなみに私は三兄妹の末っ子です。姉はいませんよ。

そうそう。リム兄様もあのパーティーに参加していました。ええ、間違いなく参加しました。

ジム兄様は家出中なので不参加でしたが。

「それは酷ひどいぞ、リム」

お父様は苦笑しながら答えます。

パーティーの時も思ったのですが、この手の台詞せりふをお父様が言うのと、やけに白々しく感じてしまいますわ。

と違って、お父様が私たち子供に対して愛情がないわけじゃありませんの。ただ、父親である前に皇帝陛下なのです。皇国や民が優先なのです。

幼い時は幾度も寂しい想いをしてきましたが、今はわかります。これが、国を背負うということ

なのだ。

「リム兄様の言う通りですわ。でもリム兄様も酷ひどいですわ。妹が虐しいたげられてるのに、助けにきてくださらないんですから」

「私が行く必要がないだろ」

「まあ、そうですね、それでも助けにきてほしかったわ」

ちよつと拗すねてみせます。すると、少し困った顔をしながらリム兄様が言いました。

「本当に虐しいたげられていたならな」

それはどういう意味でしょう。

「虐しいたげられましたよ？ 婚約してからずっと。冤罪まで掛けられましたし」

「そうか。なら、そういうことにしよう」

おや？ もしかして、お兄様気付いてらっしゃるの。

そう……気付いていたのですね。さすが、リム兄様です。その顔はいろいろご存じのようですね。一度もその件について、お父様やリム兄様と話したことはありませんのに。まあ、お父様も私に相談してくれませんでした。話してくれたらつて、少しは思いましたよ。そうですね。良い機会です。そろそろ腹を割って話しましょうか。まず、私から。

「でも、まあこれで、国の財源を削らずに済みますね、お父様」

公爵領の鉾山からミスリル鉾石が発見されたのが、六年前

その一年後、私の婚約が決まりました。

お父様の意図は、それとなくだけど察していましたわ。

お父様はミスリル鉱山が欲しいのだと。それは私も同じでした。

だからスミール様が初対面であのような態度をとられても、婚約を解消しようとは口にしませんでした。本心をひた隠しにしながら、私さえ我慢すればいいと思っていましたわ。自己犠牲が美德とは言いません。ただ……間近で見続けてきましたの。

魔の森での討伐の現状を――

討伐には正直莫大なお金が掛かります。砦を維持し、装備を常に整えなければなりません。そして、兵士たちの給料と万が一の時の手当。その他の雑費をいれると、それはそれは毎月、かなりの額になるのです。しかし、それを削るわけにはいきません。皇国の生命線に繋がるからです。

魔物から取れる魔石や解体の品を売っても賄いきれません。なので、足りない分は皇国から出ていました。皇国復興のための同盟国から借りたお金は払い終えていますけど、それでも、国庫を圧迫しています。

今回の件で、喜々としてお父様は公爵の領地を没収するでしょう。そして皇国領にする。

結果、ミスリル鉱山を手に入れるのに成功します。

これで、国庫は潤うでしょう。

ほんと、スミール様が馬鹿で助かりましたわ。やらかした罪は軽くはなりません。

「ああ。これで、国庫の負担はかなり抑えられるな」

悪びれることなく、お父様は答えます。

「例の件も進められますね、父上」

「そうだな。あの屑のおかげで表立って反対する者は少なくなるな」

「例の件って、何です？ リム兄様」

私だけ除け者は嫌ですわ。

「セリアには話していなかったか。ここ最近、辺境地の重要性を軽視する者が多い。特に、学院の生徒だ。彼らが親になつたらと思うと将来が心配だね。父上と話していただんだよ。そろそろ、矯正が必要じゃないかって」

お父様の代わりにリム兄様が教えてくれました。

「それはナイスアイデアです。徹底的に矯正しましょう。もちろん、お手伝いますわ。それで、どういう方法で？」

「新しく、合宿所のようなものを建てようかと考えてるんだけど、セリアはどう思う？」

リム兄様に意見を求められました。

「そうですね。合宿所ですか……。ならば、必須の単位として組み込んではどうでしょう？ 同時に人間性も見られますわよ。リム兄様が皇帝になった時、それは大いに役に立つんじゃないかしら」なるほどと、リム兄様は考え込んでます。

「そうそう。もし、合宿所を建てるとのなら、必ず入所者に一筆書いてもらってくださいね。〈体の一部が失われたり、あるいは寝たきり、もしくは死んでも訴えたりはしません〉って。……リム兄様、私、何かおかしいことを言いました？ かなり引いてらっしゃいますが。これ、とても大事な

ことですよ。魔物討伐に関わる者は皆書いてますよ。当然、私も」

そう答えると、リム兄様は何かショックを受けたようで、弱々しい声で訊いてきました。

「……書いているのか？」

「はい」

元氣よく答えます。

リム兄様、どうかしましたか？ かなり疲れているようですが。

反対に、お父様はとも楽しそうですね。

「……ところでセリア、あの屑たちをどうするつもりだ？」

お父様が突然話題を振ってきました。

【自動回復の魔法】を掛けてから、侍女たちに渡しますわ。その後は、魔物を誘き寄せ寄せる罫として働いてもらうつもりです」

経費削減です。肉屋からお肉を買う代金も積もれば馬鹿になりませんかね。

「リム兄様、大丈夫ですか!? 体調が優れないのでは。顔色が悪いですよ」

「……気にしないでいい」

リム兄様は途中で退席してしまいました。大丈夫かしら。お医者様呼んだ方がいいんじゃない……お父様はいらないと笑ってますが、後でこっそりお医者様を呼んであげましょう。

座学と実技は入学してすぐに試験を受けパスしているので、急いで学園に戻る必要はありません。

一か月後に控えている実地試験に間に合えば特に問題ないです。

学園は学院とは違い、超実力主義の学校ですから実力さえ学園側に示せば、最低限の出席日数でも進級できます。事実、クラスメートが全員揃ったのは入学式と実地試験だけですわ。私が学園を選んだ理由はまさにそこですね。

学園では皇族も貴族も平民も関係ありません。皆、同じ入学試験を受け、実力に応じたクラスに割り振られます。

つまり実力がなければ、皇族であっても最下位クラスになります。まあ、皇族や貴族がそうなら、かなり白い目で見られるでしょうが、勉強を怠っただけのこと。自業自得ですね。

反対に、最下位クラスからのし上がってくる強者もいますよ。

ちなみに、私は最上位のSクラスです。日々努力していますから。

それはさておき、魔の森を迂回しなければいけませんから本来なら移動時間だけで、隣国までは優に一か月以上掛かる距離です。魔の森を横断すれば二週間で着きますが、こちらはお薦めできません。命が幾つあっても足りませんよ。

本来なら、とっくに出発していいと間に合わないのですが、【転移魔法】が使えるので、ギリギリまでこっちにいられます。最悪、当日の早朝に戻ればいいでしょう。その分魔力の消費は大きいですが、特に問題ありません。鍛え方が違いますから十分戦えます。

なので、家族でお茶会をした翌日、そうそうに辺境地に戻ってきました。魔物が活動期に入りましたし。もちろん、侍女二人と、馬鹿子息とアンナを連れてですよ。